

敗戦直後の佐多稲子

——戦後改作をめぐる——

一

佐多稲子は戦後、自らの戦争責任を別決することを課題とし、今日にいたるまで反戦・反権力の立場を一貫して取り続けている数少ない作家の一人である。たとえば佐多は「戦時下のこと」というエッセイの中で、〈あの当時は、戦争の性格を知っていなかったというわけではない。日本軍閥の侵略戦争であるということを知っていたが、国民のひとりひとりがものをいうこともできずに戦場にかり出されてゆくという事情そのものに、私は巻き込まれた^①〉というように、侵略戦争としての性格を見抜きながら、国民の一人としてあえて戦争に巻き込まれた自己のあり様を明らかにしている。また「自分について」というエッセイでは、〈民衆の悲哀の外にはいたくない、という裏返されたおもしろいと、かくれみのを着得るとい

いい気な思^②〉の中で、ジャーナリズムの誘いに応じて戦地慰問を受け入れていったと述べている。

北 川 秋 雄

ところで、佐多が侵略戦争としての性格を見抜きながら、戦地慰問等の戦争協力をしていたにもかかわらず、自らの戦争責任に気付くのは、敗戦直後の新日本文学会創立の発起人に加えられないということを知ったときであるという。

敗戦の直後、アメリカ占領軍の弾圧的な支配を覚悟した私には、共産党員の獄中からの解放は、目を見張るようにして、新たな今日に直面させるものであった。が、そうであったとは言え、私はこのときまだ自身身を振り返っていなかった。つまり私は、戦時中に行動するとき何かの理由づけをしたり、うしろめたさを感じるものがあつたとしても、それはこれまでの自分の立場に対してであつて、人々を裏切るほどの悪いことをしているという意識はなかったのである。自分の行為の意味を、人情と涙で流したとでもいうのであつたらう。中野重治さんが来て、新しく組織される文学団体の発起人に私を加えることはできぬ、と言渡すよ

うにしたとき、私は、恥ずかしいことながら初めて、がく然としたのである。中野さんは私にそれを云うのを、辛くおもってくれたとおもわれる。「中野重治全集」の第二十一巻の著者うしろ書に、そのときのことを書いてある。……略……「そのとき彼女が一種の表情をしたのを憶えている。何かひと言、単語を一つくらい、口に出したのだったかも知れない」と中野さんはその「うしろ書」の終りに書いているが、たしかにそうであった。がく然としながらも、最初の瞬間、私に抗いの気持がなかったわけではない。私はそれをひと言、云った。しかし、それに対して中野さんから、作家には責任がある、という意味を云われたとき、その言葉を私は胸にたたんだ。

佐多がこの時、どのような思いの（ひと言）を言ったかは、佐多も中野も書きとめていない。

中山和子は、宮本百合子が「明日へ」^④というエッセイで浴せた手厳しい批判に、佐多が答えたかたちになっている小説「虚偽」^⑤の、〈だって、と年枝は昨日までの友情をたぐるようにし、だって、と心のうちで弾き返した〉とある〈だって〉にかかわって次のように述べている。

この「だって」という、あとのとぎれた一語にこめられたいがたい思いは、米袋をさげて寄ってくれたのは、あれは何だったのかという疑惑に通ずる。

ここには、戦争協力を許し傍観しながら、表面的に昔ながらの交友を維持したような、そういう革命運動の仲間とはそもそも何者であろうか、という根本の疑惑がひそんでいるといえよう。反戦の運動を広く組

敗戦直後の佐多桶子

織しえなかった前衛の責任、ということ高遠な問題を問うのではなかった。もつと身近な旧い仲間の戦争協力を放置し、手をかさず、はては残酷な孤立に追いこむような、かつての革命運動の仲間とは何者であったか、その責任はないかという問がそこに横たわっていた。

この中山の指摘の他にも、佐多自ら、戦地慰問は〈戦争協力に結びつくような行為ですから、夫に相談しないわけはありません。しかし、窪川さんは止めなかった。それを黙って行かせた夫というものがいるわけです〉^⑦と述べ、自らの戦争協りに加担した窪川鶴次郎の戦争責任を同時に明らかにしている。後日、吉本隆明によって〈二段階転向〉^⑧の典型として批判された壺井繁治や窪川鶴次郎が、〈帝國主義戦争に協力せずこれに抵抗した文学者〉^⑨として新日本文学会創立の発起人に加えられているにもかかわらず、なぜ自分が戦争責任を問われ除外されなければならないのかという理不尽な所遇に対する佐多の疑問や反発がその時の言葉にこめられていたものと思われる。^⑩ここから、佐多が〈新日本文学を引き廻した日本共産党〉^⑪の政治的な思想によって、〈人身御供〉^⑫にされたという古林尚の、佐多の心情によりそった理解も生まれてくる。

このように、一九四五年十二月の新日本文学会の創立に際して佐多の内外ではきわめて大きな動揺があったわけであるが、佐多はその五ヶ月後、『たたずまひ』というB6判・一段組・総頁数二二三

の、短編集を刊行している^⑩。おそらくこの本の刊行作業は時期的にみて、新日本文学会創立の発起人問題の渦中でなされたと思われるが、〈昭和二十年末〉という日付のある「まへがき」で佐多は次のように述べている。

この小説集は、私が旧姓窪川稲子から新しく佐多稲子に改めて、いちばん初めに出されるものになる。私はこの本が出来てきたとき、きつと複雑な思ひをそ、られて、自分の新しい姓の入ったこの小説集を、しみじみと眺めるにちがひない。……略……佐多稲子といふ姓名になつた今後の自分の仕事に、自分自身への責任と希望を持つてゐる。この意味で言へば、個人的な理由で変へたことではあるけれど、このことを契機にして自分に新たなものを生じさせたい、と、覚悟の上でも感情のうへでもねがつてゐる。この気持から言へば、佐多姓で出されるこの小説集の中の作品は、佐多姓になる以前のものばかりである。再録のものもあり、私自身としては不満なものであるが、もしも新しい読者があつてこの小説集を手に入れられるならば、私とこの本との、このやうな関係を知つてもらひたいとおもふ^⑪。

佐多稲子という新しい筆名についての、新たな思いが語られているが、とくに〈二十年來の私の作家生活の思想的な現はれは私の書いたものが客観的に、厳正に表明して呉れ^⑫〉。だろうというように、自分に對する評価はこれまで書いてきた作品によつてなされるといふ、自信に満ちた表現が目につく。さらにこの単行本が〈佐多姓に変わる以前のものばかりで、再録のものもある〉、つまり戦前・戦

中の作品の再録集であることを、〈新しい読者〉にわざわざ断わつてもいる。たしかに収録された六作品中、「営み」「視力」「子供」「氣づかざりき」は既発表のものである。そしてたとえばこの単行本に収録された「氣づかざりき」には、

「ええ、でも、男の人は大変ですわね。兄もさう言つてゐますの。軍人なんて嫌ひだつたけれど、戦争のために軍人にされてしまつたつて。」
「さうですね。さういふ人が多いだらうなア。この戦争のために運命の變つた人が多いことせうね。男も、また女のひとも」^⑬

という作中人物の会話がある。自分に対する評価はこれまで書いてきた作品が示してくれるであろうという自信に満ちた表現や、再録がほとんどであるという不満すら漏らされている先の「まへがき」を額面通りにうけとめた〈新しい読者〉の中には、「氣づかざりき」のこのやうな部分に佐多の戦時下抵抗の姿勢を読みとる者もあるであらう。

ところが、この「たたずまひ」収録の「氣づかざりき」は、戦時下に発表されたものと比較すると、この反戦的な表現を含めて細部にわたる改稿がなされているのである。しかも佐多は今日にいたるまで、このことについて一切ふれていない。新日本文学会創立の発起人問題で、佐多の戦争責任が問われていた渦中の刊行であるだけに、戦時下のみならず、戦後発期の佐多稲子評価にかかわる重大

な問題であるといわねばならない。

一一

「気づかざりき」は一九四二年七月から十二月にかけて雑誌『婦人日本』に連載され、一九四三年二月、全国書房から同名の単行本として刊行されている。ヒロインの昭子は会社の同僚の山本の勤めで、山本の友人の萩原と見合いをするが、二回目に出会った時、萩原から彼が出征中の兵隊であること、さらに一ヶ月の休暇中に結婚してこいと部隊長に命令され、出征先の（海拉爾）から帰郷していることを告白される。萩原が再び戦地にもどるまでには話はまとまらないが、昭子の心はしだいに萩原に傾いていくというものである。

この単行本『気づかざりき』所収の作品については、「戦前・戦中の佐多稲子における創作方法の一側面」^⑮と題する拙稿の中ですでに論じたことがある。私はそこで、出征兵士の萩原や（銃後）の妻としての正子の姿が美化されていることに注目し、「気づかざりき」には一九四一年から翌年にかけて戦地を慰問した佐多の、（内地がしつかりしてゐてこそ、この山の上の兵隊さんの毎日が心安らかなものになる）^⑯や（戦地で苦勞をしてゐる兵士の方の戦ひの有様を日本の女の人のみんなに見せたかつた）^⑰という感慨が色濃く投影されていることを指摘した。そしてこの作品は、戦時下の職業婦人と出

征兵士との見合いという時宜に適した題材をとりあげ、出征兵士を美化し、出征兵士が望む（銃後）の国民のあり方を疑う余地のない絶对的なものとして、国民の一人であるヒロインの昭子が、いかに身を添わせていくかという、きわめて時局色の強い問題を追求した作品であり、佐多稲子の戦時下屈服の姿勢をみる事ができる典型的な作品であると位置づけた。

では、他ならぬこのような作品を佐多は戦争責任問題で内外ともに揺れていた敗戦直後の時期、単行本『たたずまひ』にどのようなかたちで再録しているのだろうか。以下、上段に雑誌『婦人日本』初出の本文を、下段に『たたずまひ』所収の本文を、主な異同部分に限って掲げる。変更部分については傍線を付した。句点・行分けの異同や漢字・平仮名の表記上の異同は除外した。なお、雑誌初出のものと、単行本『気づかざりき』所収のものとの異同については、雑誌初出にみられた多くのルビがはずされたほか、明らかな誤植と思われる部分が単行本で改められただけで、著しい本文の異同は認められない。^⑱

(1)（昭子との見合いについて、萩原と妹の真琴が語る部分）

「一ヶ月の休暇で妻帯をして来い、
といふ部隊長が無理なのさ。
は、は、」
「一ヶ月の休暇で妻帯をして来い、
といふ話が無理なのさ。は、は、」
と、笑ひにまぎらした。

と部隊長の名を口にした親しみ
（一五五頁）

(一九四二年九月号)

で笑ひにまぎらした。

(2) (1)と同じ)

「お前はそりや、俺のことが感情にあるからさ。然し、俺のことはとにかく、お前の結婚問題も考へなければいかんね。もう幾つだい。二十四だらう。」

「いやよ。私なんかまだ。それよりもねえ、お兄さん。私も満州へ働きにゆかうかしら。」

「この頃、婚期のおくれた女は、二口目には大陸へゆかうかといふつて話だね。お前もその口かね。」

「まあ、ひどい。だつて、私なんかどうせ東京でもひとり暮してゐるんですもの。どこで働いても同じだとおもふの。」

「うん。」
萩原は、もう両親のない妹の身の上を、ちよつといとしく思ふやうに、じつと真琴の顔を見つめてゐた。大陸にある者の感覚で言へば、東京で働くのも、満州で働くのも同じだといふ妹の言分は、別に大変なこと

「お前はそりや、俺のことが感情にあるからさ。然し、俺のことはとにかく、お前の結婚問題も考へなければいかんね。もういくつだい。二十四だらう。」

「いやよ。私なんかまだまだ。」

萩原は、もう両親のない妹の身の上を、ちよつといとしく思ふやうに、じつと真琴の顔を見つめてゐた。その考への中に、いつとなしに昭子の顔が浮んでくる。

(二五六頁)

にも聞えなかつた。海拉爾あたりでさへ軍閥係などには若い女性が幾人も事務をとつてゐる。そんな考への中に、いつとなしに昭子の顔が浮んでくる。

「考へておいてくれる。」

「考へておかう。」

(一九四二年九月号)

(3) (真琴に誘われて萩原が歌舞伎座にオペラを見に行った部分)

観客席は上の方までいつぱいである。萩原のすぐうしろの方にイギリス人らしい外人の夫婦もゐる。今日の出しものは「ファウスト」であつた。

(一九四二年十月号)

(二七〇頁)

(4) (昭子の姉の正子が昭子と萩原の見合いについて思い悩む部分)

相手の人が戦地へ帰り、時日が経つてしまへば、昭子ももとの心に立ち直るだらう、と思はれた。

明子の心が、今度の話で、動揺してゐるのは当たり前だと思はれた。日本人として戦地にある人に対して尊敬とおもひやりを抱かないものはない。

(一九四二年十一月号)

い。

(5) (萩原が再び戦地にもどるため東京を立つ時、見送りに来るはずの昭子が来なかったことについて、萩原の心境を描いた部分)

彼は再び戦友たちのところへ帰つてゆくのを、ほつとするやうに、はじめて自分の本当の生活に立ちもどるやうに感じてきてゐる心持を、再び鮮やかに浮かび上らせるだけであつた。

(一九四二年十一月号)

彼は再び戦友たちのところへ帰つてゆくのを、却つてほつとするやうに感じてきてゐる心持を、再び鮮やかに浮かび上らせるだけであつた。

(二〇一頁—二〇二頁)

(6) (5)と同じ)

真琴だけが一生懸命、兄との別れを心にしみこませ、再び戦地へ帰つてゆく兄の心を満たさうと努力してゐる。それはいじらしかつた。彼は本当に真琴を満州へ呼んでやらうかと思つてゐた。東京の真ん中へひとりおいておくのが厭な気がした。

(一九四二年十一月号)

真琴だけが一生懸命、兄との別れを心にしみこませ、再び戦地へかへつてゆく兄の心を満たさうと努力してゐる。

それはいじらしかつた。

(二〇二頁)

(7) (発車に際して、山本と萩原が挨拶を交わす部分)

「いや、本当にいろいろありがたう。君も身体を大事にして、早く、

「いや、本当にありがたう。君も身体を大事にして、早く結婚でもす

結婚でもするんだな。」

「いやどうも、然し僕も銃後でがん張りますよ。元気でゐて下さい。」
そんな別れの言葉のうちに発車のベルが鳴つた。

(一九四二年十一月号)

(8) (発車に際して、萩原と真琴の挨拶の部分)

真琴は汽車といつしよに歩き出して、高い声を出した。笑つてゐた苦の顔がいつか歪んでいつた。

「郷里の兄さんたちによろしく。」

「あ、さよなら。」

萩原は窓から少し身体をのり出させて、軍人らしく失敬をした。

(一九四二年十一月号)

るんだな。」

「いやどうも。然し僕もがん張りますよ。元気でゐて下さい。」
そんな別れの言葉のうちに乗車のベルが鳴つた。

(二〇三頁)

真琴は汽車といつしよに歩き出して、高い声を出した。笑つてゐた苦の顔がいつか歪んでいつた。

「郷里の兄さんたちによろしく。」

「あ、さよなら。」

萩原は窓から少し身体をのり出させて、失敬をした。

(二〇四頁)

(9) (萩原を見送つた後の真琴と山本の会話の部分)

二人はホームの階段を降りて、省線の電車のホームへ歩いて行つた。

「真琴さんはまた淋しくなりましたね。」

「ええ、でも、男の人は偉いと思

ふわ。私も男に生まれたかつたと思ふわ。男の人が出征なされるたんびに私、羨ましくなりますわ。私、お

「ええ、でも、男の人は大変ですわね。兄もさう言つてゐますの。軍人なんて嫌ひだつたけれど、戦争のために軍人にされてしまつたつて。」

転婆だものだから。」

「僕なんか恥づかしい組です。」

まあ、統後で御奉公するのも、戦争に行つた気で一生懸命やるつもりですがね。然しときには、兵隊さんの美しさに羨ましくなりますよ。」

(一九四二年十一月号)

「さうですね。さういふ人が多いだらうな。この戦争のために運命の変わった人が多いことでせうね。男も、また女のひと。」

(二〇五頁)

(10) (姉の出産で見送りに行けなかつたことを電報で萩原に知らせ、帰宅した夜、昭子が床について一日の出来事をふりかえる部分)

その電報を萩原は汽車の中へ読み捨てるだらうか、それとも北満の地まで持つて帰つてくれるであらうか、などといふことまで思つた。すると明日から前進するといふ今朝の便りだつた義兄のことも思ひ描かれる。……略……一晩のうち二つのことが重なつて緊張したあわたしい夜だつたが、その緊張は如何にも大きな戦争をしてゐるこの日本の事情が、この一夜の昭子の上にも反映してゐるといふ風なものだつた。

(一九四二年十二月号)

その電報を萩原は汽車の中へ読み捨てるだらうか、それとも北満の地まで持つてかへつてくれるであらうか、などといふことまで思つた。すると、明日から出勤するという今朝の便りだつた義兄のことも思ひ描かれる。……略……

一晩のうち二つのことが重なつて、緊張したあわたしい夜だつたが、その緊張は如何にも日本の今日の事情が、この一夜の昭子の上にも反映してゐるといふ風なものだつた。

(二二〇頁)

(11) (昭子が姉を見舞つた後、病院の屋上で甥の裕と会話する部分)

「お父ちゃん、偉い。」

「お父ちゃん、偉い。」

「うん、さう。お父ちゃん偉いわね。お母ちゃんも少うしね。そしてね、みんな兵隊さんは偉いのよ。裕も偉くなるのね。お母ちゃんも赤ちゃんとやつちやひなさい。叔母ちゃんも寝よう。いつでも。」

さう言ふと、裕は承服しかねるやうな、少し考へるやうな表情で、近くの桜の樹に雀のとび交ふのをちつと見つめて返事をしない。

(一九四二年十二月号)

「うん、さう。お父ちゃん偉いわね。お母ちゃんも少うしね。そしてね、裕も偉くなるのね。お母ちゃんも赤ちゃんとやつちやひなさい。叔母ちゃんも寝ませう。いつでも。」

さう言ふと、裕は承服しかねるやうな、すこし考へるやうな表情で、近くの桜の樹に雀のとび交ふのをちつと見つめて返事をしない。

(二二八頁)

(12) (義兄の友人である青柳医師と昭子の、病院屋上における会話の部分)

たゞ漠然と青柳はさう言つて、何かを感じたらしいのを、そのまま濁して、

「もう中支の方は暑くなるでせう。僕も、今度、兵隊さんになりましたよ。」

「えッ、いらつしやいますの。」

「え、多分ゆくでせう。医者はずぐから少尉さんですから、その点いですがね。」

(一九四二年十二月号)

(二一九頁―二二〇頁)

(13) (病室における正子と昭子の会話の部分)

「鳩ぼつぼのゐるお宮へゆく。」
と、裕が言ふのを昭子が説明して
「鬼子母神様へ寄る約束をしたの
よ。」

「あら、よかつたこと。お父ちゃ
んの武運長久をお祈りしてくるの
ね。」

(一九四二年十二月号)

「鳩ぼつぼのゐるお宮へゆく。」
と、裕が言ふのを明子が説明して、
「鬼子母神さまへ寄る約束をした
のよ。」

「あら、よかつたこと。お父ちゃ
んの御無事をお祈りしてくるのね。」

(二三三頁)

(14) (正子が退院して、赤ん坊とともに自宅にもどつた時の昭子との会話の部
分)

正子は、赤ん坊の殖えたことで気
持は一層落ちついてゐる風で、夜な
ど、二人の子供が傍らに寝てゐるの
を見ながら昭子に言ふことがあつた。
「この小さな頭が、私の勳章よ。」
二つになつたわね。」

「勳章ちゃんや。」と、昭子は赤ん
坊の頭を撫でる。

(一九四二年十二月号)

正子は、赤ん坊の殖えたことで気
持は一層落ちついてゐる風で、夜な
ど、二人の子供が傍らに寝てゐるの
を見ながら、昭子に言ふことがあつ
た。

「この小さな頭が、私の太陽よ。」
「さうね。」
と、昭子は赤ん坊の頭をなでる。

(二三五頁)

(15) (山本から戦地にもどつた萩原の手紙を見せられた時の明子の気持を描い
た部分)

再び任地へ立ちかへり、心安らかに
軍務にいそしんでゐる。上京中の

再び任地へ立ちかへり、心安らかに
つとめにいそしんでゐる。在京中の

敗戦直後の佐多稲子

御好意感謝に堪へず、といふ文面は、
さばくとして余計なことを言はず
に如何にも軍務に服してゐる人の手
紙らしかつた。わざく御多忙中お
見送りを頂いた宮永昭子氏によろし
くお伝へを乞ふ、と添へてあつた。

(一九四二年十二月号)

(二三三頁)

全体のストーリーには変更がないが、ここに掲げた他にも、漢字
と平仮名の表記、助詞、句点など細部にわたつて手が入られてい
る。右に掲げた改稿で特徴的なことは、戦争や兵隊に関する言葉の
変更が多いということである。(1)(4)(5)(8)(9)(11)のように作中人物の、
兵隊に対する親近感や尊敬の念を示す表現が削除されたり、書き換
えられている。その他に、(2)(6)のように作中人物の、満州に対する
憧れを示した部分の削除や、(5)(10)(13)(15)のように語り手や作中人物の、
戦争に対する肯定や評価を思わせる表現についての書き換えがある。
(3)(14)の書き換えは、今日ではその必要性が疑われるほどであつて、
改稿に際しては細心の注意が払われていることがわかる。とくに(9)
のように戦争や兵隊を讚美した表現を、逆に反戦的表現に書き換え
るにいたつては、作品の内容を左右する重大な変更である。

ちなみに雑誌初出の「気づかざりき」について、次にいくつかの
問題点をあげてみよう。再び出征していく萩原は、見送りに来ると

言つた昭子が、姉の正子の出産で来なかつたため、違約したと思ひ込み、次のように心の中で思う。

決して昭子といふひとり女性の性にはなく、何かしら全体に対してある失望が感じられてゐた。……略……内地の生活は、遠くにおて想像してゐたよりも確りしたものであつた。それは喜びであつたし、帰つて戦友たちにお土産話をするにしても、これほどいい、お土産話はない。それなのに、遠くにおた自分たちが、あんなに内地のことを案じてゐる、と思ふと、それに対してもつと何か温く触れてくるものが欲しかつた。

萩原のこの言葉は、死地に赴く者の言葉として、《銃後》の国民には絶対的な重みを持つてくるのである。事実、電報で見送りに行けなかつた理由を車中の萩原に知らせた後の昭子は、《戦地へゆく人へのいたはりで、萩原を傷つけることに為たくはなかつた。この間からの自分の悩みは、そのことにだけか、つてゐる》^②と思う。死地に赴く者の言葉として、先の萩原の言葉が絶対化されている以上、昭子の就くべき道は一つしかない。佐多は昭子が萩原に対して恋愛感情を抱き始めているというように、兵士を支える銃後の国民としての義務の履行を、恋愛という自主的・個人的感情にすりかえて行わせることにする。佐多はこのように愛情や友情などの日常的な次元の発想を導入することで、戦時下の人間関係をとらえ、非人間的なものの極みであつた戦時体制の全体像を把握する観点を曖昧にしてしまふ。

たとえば、昭子のように《幸福つてことは、何もいつでも揃つてゐることだけぢやなくつて、別れてゐても愛してゐることが幸せなんだ、つて、姉さんの毎日が私におしへて呉れてゐる》^③という日常的な幸福感で姉夫婦の別離状態を肯定することは、戦争によつて夫婦が引き裂かれてゐる現状を是認し、それが本来夫婦にとつては異常な、非人間的状態であるという現実を捨象することになる。また、姉のけげな姿を美しいと感じる昭子は甥の裕にむかつて、《お父ちゃんは偉いね。お母ちゃんは少うしね。そしてね、みんな兵隊さんは偉いのよ》^④とも言う。肉親である父への愛を一般的な兵隊への愛に転化させることで、兵隊の美化が行なわれ、侵略戦争に加担した現実存在としての兵隊の姿は捨象される。あるいは、再び戦場に赴く列車の中で萩原は《戦友たちのところへ帰つてゆくの、ほつとするやうに、はじめて自分の本当の生活に立ちもどるやうに感じてきてゐる心持》^⑤になるとされているが、ここでも自分を親友が待つてくれるという友情の次元で戦場を発想することによつて、そこがまた陰惨な殺戮の場であることや、その場に再びもどらねばならないという萩原の非人間的な状況はきれいに捨象される。

このように愛情や友情などの日常的な次元の発想で、戦時下の人間関係をとらえる方法によつて創られた「気づかざりき」は、戦後の改稿にみられたように、戦争讚美の具体的な表現を削除したり、

書き換えさえすれば、出征兵士と職業婦人の単なる恋の物語に、もの見事に質変する構造を本来的に持っている。改稿に際して、佐多にこのことが見えなかったはずはない。

二

佐多の戦後改作については、すでに前田廣子「佐多稲子——戦争責任への屈折^②」がある。前田はここで「台湾の旅」という小説の、雑誌『台湾公論』に一九四三年九月から十一月及び、一九四四年一月に連載された初出のものと、一九四八年十月刊行の単行本『私の長崎地図^③』に収録された時のものの、異同について論じている。そして、一九四三年十月の『台湾公論』の第二回掲載部分は未見で本文の照合が出来なかったがと断って、〈プロレタリア小説の作家に共感を寄せたり、思想弾圧によつて台湾に逃れ、そこでわずかな良心を保っている医者生き方を肯定する^④〉ような表現が戦後、書き換えられたものであると推定している。けれども戦後改作というところでは、これまでみてきたように、前田がとり上げた一九四八年より、ほぼ三年前の敗戦直後の、戦争責任問題の渦中ですで行なわれていたわけである。

ところで佐多は「自分について^⑤」の中で、次のように述べている。

「戦争責任追及」の中で私は友人たちにいたわれつつ、しかしその

いたわりは、えこひいきでもあり、そしてまた片方、私がかつてプロレタリア作家であったということで一層その責任の指摘されるものであるのも当然でもあった。私は内部の関係でえこひいきされつつ、「作家の戦争責任追及」が提出されることに言いようのない当惑も感じた。……略……それは責任のけじめが曖昧だったからである。少なくとも作家たちに対してそれが言われるときそのけじめは曖昧だともわれた。

佐多がいうように当時の新日本文学会には〈責任へのけじめが曖昧〉な部分があつたことは、先述したとおり事実であろう。しかしながら、戦時下の作品を再録するにあたって、改稿の事実には一切ふれずに戦争讚美の表現を書き換え、あたかも戦争反対の作品を戦時下に発表していたような印象を〈新しい読者〉に与える行為を一方で行なっていた佐多自身の、戦争責任問題の渦中での〈けじめ〉の無さは今日にいたるまで不問に付されたままである。

畑中繁雄は一九四五年九月一日にGHQから言論機関に対して出された「日本に与うる新聞遵則」、いわゆるプレス・コードについて、〈これはただに新聞だけにとどまらず、雑誌、単行書等、あらゆる刊行物にたいしても適用され、占領中、日本の刊行物すべてを規制する最高の法規であつた^⑥〉とし、敗戦後の日本の言論出版界は軍国主義体制下の取締りからは解放されたが、〈それ以上に恫喝的威力をもったプレス・コードが背後から睨みをきかせていた。戦争中、軍部や官僚がもちいた「事前検閲」は、占領軍によつてもそ

のまま踏襲された。……略……いったんこれにひっかかったとなると、有無をいわさず、削除、撤回は先方側のおもむきままであり、こちら側の釈明、言い分はいっさい聴かれなかった^②と述べている。

時期的にいつて、このようなGHQの出版統制のもとで、佐多の『たずまひ』も刊行されたと思われる。戦時下の作品をそのまま掲載することは、このような出版事情のもとでは不可能なことであり、それをしなかったといつてあながち批判することはできないであらう。

けれども、戦後再録された「気づかざりき」の本文をみるかぎり、削除のあとや削除部分を埋めたり、つじつまを合わせる作業の痕跡は認められず、佐多の自主的な改稿と考えられる。何故わざわざ戦争讃美の顕著であった「気づかざりき」を、戦争責任問題の渦中で、しかもこのようなGHQの出版統制下、作中人物に全く逆の反戦的言辞をはかせるまでに改稿して、再録する必要があったのかという疑問は依然として残る。戦争責任について新日本文学会の曖昧さを詰り、自分を(えこひいき)^③した周囲のあり方を問い質す佐多の、一方で自らの戦争責任の痕跡をひそかに改竄する暗い部分が浮かび上がってくる。戦争責任問題の渦中の佐多稲子について、断罪も同情も拒否したところで、その実像をとらえる作業の必要性があらためて求められると思うのである。

注

- ① 『国民の歴史』(一九六五年二月)。
- ② 『新日本文学』(一九五六年九月)。
- ③ 「時と人と私のこと(4)——戦時中と敗戦のあと」(佐多稲子全集 第四巻) 講談社一九七八年三月) 四五頁―四五二頁。
- ④ 『婦人と文学——近代日本の婦人作家——』(実業之日本社一九四七年十月) 所収。
- ⑤ 『人間』(一九四八年六月)。
- ⑥ 「佐多稲子の『抵抗』をめぐって」(『国語通信No.28』筑摩書房一九四六年一月)。
- ⑦ 『年譜の行間』(中央公論社一九八三年十月) 二三―三五頁。
- ⑧ 『荒地詩集1956』(一九五六年四月)。
- ⑨ 『新日本文学』(一九四六年三月)。
- ⑩ この点については、小林裕子「佐多稲子の挫折と再起——『虚偽』『泡沫の記録』をめぐって」(『昭和文学研究第7集』一九八三年七月)が詳しい。
- ⑪⑫ 「戦争下の佐多稲子」(『国文学』解釈と鑑賞 一九八五年九月)。
- ⑬ 萬里閣一九四六年五月。
- ⑭ 前掲書一頁―四頁。
- ⑮ 前掲書二頁。
- ⑯ 「子供」(『読売新聞』一九三五年八月十三日)、「営み」(『新潮』一九三九年六月)、「視力」(『文芸春秋』一九四〇年十一月)、「気づかざりき」(『婦人日本』一九四二年七月―十二月)であるが、「たずまひ」及び「成長」の初出は未だ確認できていない。
- ⑰ 前掲書二〇五頁。
- ⑱ 『同志社国文学 第二十三号』(一九八四年三月)。

(19) 「最前線の人々」(「日の出」一九四二年七月)。

(20) 「空を征く心——航空記念日に因んで」(『婦人公論』一九四三年十月)。

(21) 雑誌初出と単行本「気づかざりき」の本文の異同については、誤植を改めたと判断されるものを除くと次のおりである。(註は雑誌初出を、

④は単行本「気づかざりき」所収の本文を指す。

(註)「聞き合せてから返事をするついでいふのも時間がかり過ぎるわね。」(七月号) → ⑤「聞き合せてから返事をするついでいふのも時間がかり過ぎるわ。」(二十四頁)

(註)「南支の方らしいのですけれど。」「あ、南支ですか。」(八月号)

→ ⑥「中支の方らしいのですけれど。」「ああ、中支ですか。」(三八頁～三九頁)

(註)その頃、昭子は、正子にすべてを話して、くつたりと疲れの出た身体で自分の部屋へ入って来てゐた。(九月号) → ⑦その頃、昭子は、正子にすべてを話して、くつたりと疲れの出た身体で自分の部屋へ入って来てゐた。(九二～九三頁)

(註)産室の中はあか／＼と電燈がともり、(十一月号) → ⑧分娩室の中はあかあかと電燈がともり、(一五三頁)

(23) 『婦人日本』一九四二年十一月号。

(24) 前掲雑誌一九四二年十二月号。

(25) ②に同じ。

(26) 西田勝編『戦争と文学者』(三一書房一九八三年四月)所収。

(27) 五月書房。

(28) 前掲書一九六頁。

敗戦直後の佐多稲子

(30) ②に同じ。

(31) 『賞書 昭和出版弾圧小史』(図書新聞一九七七年一月)一三七頁。

(32) 前掲書一四四頁。

(33) ②に同じ。